慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	A・H・ラヂーシチエフ著 渋谷一郎訳 ペテルブルグからモスクワへの旅
Sub Title	
Author	野地, 洋行
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.7 (1959. 7) ,p.657(89)- 662(94)
JaLC DOI	10.14991/001.19590701-0089
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590701-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

合併は、資本の集中・独占化の重要な一形態であるから、合併の「効果の」分析は、あくまでも、この集中独占化傾向の「効果」・意義として把えねばならない。このケース・スタディにおいても明らかなように、どの産業においても集中独占化の傾向は基本的な法則として作用しており、それゆえ、「合併が行なわれなかった場合の他の可能的状況」は、競争淘汰の進行→独占、又は価格協定の成立等となることは当然である。したがって、合併と、合併が行なわれなかった場合に生じたであろうところの価格協定等とを比較してみても、それは、集中独占化傾向の中での集中のさまざまな諸形態の比較にすぎないものといわねばならない。これでは、さまざまな形態で行なわれる集中独占化傾向の〝効果〟・意義は全くとらえられない。

(三) 今述べたような基本的欠陥と結びついて、具体的には多くの欠陥がみられる。たとえば、

(1) 「合併の原因」について。合併をもたらす原因として、激しい競争があげられているが、その分析は表面的であり、何故に、かかる激しい諸資本間の競争が資本主義の下で必然的になるのかの問題にまで迫ってはいない。

さらに、横断的多数企業の合併の原因として、投機的利潤獲得の動機が全く軽視されていることも問題であろう。これは考察対象(投機的トラストの典型たる諸繊維トラスト——English Sewing Cotton Co., Yorkshire Woolcombers' Association 等——と比べれば、セメント業の APCM の形成には、投機的面は少ないと考えられる。)にもよるが、また、著者が創業者利得について十分な理解をもたないことにもよるのではなかろうか。

(2) さらにまた、集中・独占にとってきわめて重要な縦断的企業合併の考察が軽視されたことにも問題がある。これは研究課題・考察対象からの当然の限界と言われるかも知れない。しかし、横断的企業合併は縦断的企業と対比され、全国民経済構造の中で、それぞれ位置づけられて、はじめてその意義が明確となろう。

この点は、たとえば、石鹸産業におけるリーヴァとウニの合併の把握における不十分さとしても現われている。すなわち、その合併・ユニリーヴァの成立は、石鹸とマーガリンに限られない全油脂工業を包括するヨーロッパ最大のトラストの出現であり、世界的な規模での原料と製品市場の支配を伴っていたはずである。このような意義は全く分析されず、この著作では、ユニリーヴァ成立が会社の経営管理の再組織・合理化に与えた影響のみが重視されている。

以上のような、さまざまな欠陥をもつとはいえ、さきにのべたようにこの著作が英国独占研究の上にもたらす利益は否定できない。これに刺戟されて、より多くの産業、また、より重要な諸産業における独占の形成・発展の歴史が研究されるならば、独占資本主義研究は一層前進するにちがいない。

書評及び紹介

A・H・ラヂーシチェフ著
渋谷一郎訳

『ペテルブルグからモスクワへの旅』

一、この本が飜訳されたことの意味

ロシヤ文学に関していえば、われわれは現在極めて多くのすぐれた訳業をもっている。だがもう一歩進んで、そのようなすぐれた文学を生むに至ったロシヤの思想史的背景にまでふみこんだ研究は、となると、われわれはそれが余りに欠けているのに驚かされる。ほとんど、ロシヤ思想の研究は文学の面にだけ、つまり市場的に保証された部分だけが繁栄していたといっていいだろう。

ところが十八世紀のフランス啓蒙思想家達の場合と同じく、ロシヤ文学の特徴は何よりもまず、それが社会批判の強力な武器だったということに見出される。そしてロシヤ文学の場合、徹頭徹尾この社会批判を離れることがなかった。それは「ロシヤ文学によって書きつづられた、ロシヤの生活にたいする偉大なる公訴状」(ゲルツェン「ロシヤにおける革命思想の発達について」)であった。

日本におけるロシヤ文学のうけ入れ方は、どれだけロシア文学のこの社会性の認識にもとづいているか、極めて疑わしいものがある。巨大な社会的問題をはらんだ文学も日本に移入される時、大正期を中心として特徴づけられる人格主義・教養主義によってその社会性をぬきとられ、単に個人心情の文学としてうけとられ、人生観的、人格主義的なものに還元されてしまうのである。日本でのロシヤ文学の一般の理解は余りにも文学的であったということができるであろう。このことは翻訳市場にある制約を課していたと考えられる。

ロシヤ文学は社会批判を離れることがなかった。というよりは、ロシヤにおける社会批判は常に文学活動を通してなされたというべきだろう。それはもちろん一面においてツアーリズムの狂暴な弾圧によるものでもあるが、又他面、客観科学としての社会科学が成立する為の現実的・経済的条件がまだ成熟していなかったからでもある。かくしてラヂーシチェフを先駆とするゲルツェン、ベリンスキー、チェルヌイシェフスキー、ドブロリュボフ、ピーサレフ等々の革命的思想家達はすべて文学者であり、かつ文芸批評家でもあった。ロシヤ文学の繁栄に比してロシヤ思想の研究が十分になされなかったのは、上でのべたような、日本でのロシヤ文学のうけ入れ方と無関係ではない。すなわち、余りに文学的な理解はその社会性の看過へ、したがってこれらロシヤ社会思想家達を研究することの不十分さ、彼らの著作を翻訳しない怠慢さとなって現われている。ここに渋谷氏の努力によってラヂーシチェフの「旅」の翻訳が現われたこ

との大きな意味がある。「旅」は文学と社会思想のボーダー・ラインにあるもの、あるいは文学的に表現された社会批判といえようが、この訳業は、文学が思想研究の深みにまで降りて行きはじめた貴重な一石である。私は何よりもまずこのことを高く評価したい。

二、ロシヤ啓蒙思想の性格とラジーシチェフの地位

ベルジャェフが「ラジーシチェフが『ペテルブルグからモスクワへの旅』……を書いた時にロシヤ・インテリゲンチャは生れた」（「ロシヤ思想史」）というように、ラジーシチェフはその思想の主題においても又その社会批判の文学的表現法においてもロシヤ・インテリゲンチャの原型であると考えられる。ではロシヤ・インテリゲンチャの特性とは何であろうか。

フランスにおける十八世紀の啓蒙思想家達の発言が、フランス絶対王制の下での力強いブルジョア的発展によって裏づけられているとすれば、十八世紀末のロシヤ啓蒙思想家達はかれらの主張を裏づけるべき現実的な支えをその背後に持つことができなかった。彼らは西欧諸国の啓蒙主義者のようにブルジョアジーの代弁者として規定することは決してできない。「十八世紀末―十九世紀はじめのロシアの反農奴制的な啓蒙主義的イデオロギーの特色は、それが、主として貴族社会の先進的な人々のあいだで、部分的には『ラズノチンネツ』（平民出のインテリゲンチャ……筆者注）のあいだで発展したということである」（ソビエト科学アカデミー「世界哲学史」）。

啓蒙思想家の多くが貴族であったということは単に彼の出身の問題ではなく、ロシヤにおいてはフランスの啓蒙思想が、フランスとは異なった経済的基盤の上に移入されたということを現わしている。苛酷な農奴制度と、地主貴族の殆ど無制約的な支配は、ロシヤにおける資本主義的発展をおくらせたばかりでなく、マニュファクチュアでの工業生産がみられる場合にもそれは農奴制的にゆがめられたものとなった。

たとえば、自由な労働力の代りに一つの農村全体がマニュファクチュアの労働力として売買されたのである（飯田貫一「ロシヤ経済史」）。ロシヤにおいてはフランス革命をまき起したような、前進的、闘争的なブルジョアジーの成熟はまだみられなかった。ロシヤ啓蒙思想家たちは「ロシアに形成されつつあった大ブルジョアジーの代表者ではなかった。大ブルジョアジーは、主として、商人のなかから補充され、地主的専制権力の支持をえて発展していたが、革命的な勢力ではなく、自分の政治的、経済的要求を、ツァーリズムや支配的な地主階級に公然とはつきつけなかった」（「世界哲学史」）。

だが、彼らの母国がブルジョア的発展から自由である（欠けている）ということは、彼らがブルジョア的利害の制約からも自由であることを意味している。かくしてロシヤの啓蒙思想家はフランス啓蒙主義者以上に啓蒙主義的になることができた。フランス革命の進行と共に、自由・平等・博愛の合言葉が、やがて一体誰の為の自由であり、誰の為の平等であったかが判ってくると、後代のロシヤ啓蒙主義者達は、このフランス革命の成行きを非難し、失望し、憤激するであろう。フランス人が理性と正義の名を、専ら第三階級のものとして用いたのに対して、ロシヤ人がそれらを用いる時、それは文字通り人類の為の、すなわちロシヤにあっては農奴の為の理性と正義となる。ロシヤにおいて専ら解放されねばならないのは第三階級ではなくて農奴なのだ。

すでにのべたように、この農奴解放の思想の担い手は農奴自身ではなくて貴族である。かくして啓蒙主義はその本来の母胎たるブルジョアジーの手を離れることとなり、ロシヤ・インテリゲンチャに特有の諸性格・諸問題はすべてこのことに根源をもっているのである。彼らはフランス啓蒙思想の子としては西欧社会とフランス革命とに憧れる。だが、ロシヤにおいてはその思想を実現すべき力は農民の中以外にはどこにもないのである。西欧的革命への期待とそれへの失望、スラヴ的現実への絶望とスラヴ的農民への期待、要するに一八四〇年代にもっとはっきりした形でロシヤ思想史上に姿を現わす西欧派とスラヴ派の二大潮流は、すでにこのラヂーシチェフの著作の中にその未分化的な精神原型を持っているのである。整理してみよう。

(一) 啓蒙の光に照らされた際の怪奇・醜悪なロシヤの姿。西欧とフランス革命、理性と社会契約への渇仰。

(二) 革命を実現すべき唯一つの力としてのロシヤ農民への信仰。

(三) 革命思想によって打倒されねばならないのは、貴族たる啓蒙思想家自身であることから生れる自己嫌悪と無用人感。

ラヂーシチェフの中に未分化的に、やがてロシヤ・インテリゲンチャの中に顕在的に定着される思想の主要なモチーフは大体このようなものであると考えられる。

三、この本の内容

ここにおいては天真らんまんとも思えるほどの驚くべき卒直さと勇気によって、痛烈なツァーリズム支配体制の凡ゆる局面への攻撃がなされている。それはペテルブルグからモスクワへの一貴族の旅行記として一七九〇年に出版されたが、二十四の宿駅を表題とするその章句の一つ一つがすべてこれツァーリズム・ロシヤの社会批判の言葉である。

フランス啓蒙思想の光の中に、一方では巨大な官僚組織全体の腐敗（我々はその文学的定形にいかに親しんでいることか）、不正な裁判、地主や上流社会の頽廃、宮廷の堕落、野蛮な検閲制度と迷信にみちた教会、これらに対してきびしい攻撃がなされると同時に、他方では農民の悲惨な生活と更にその上に加えられる人格的侮蔑、たとえば、兵役の為の農民の売買、強制された結婚などが烈しい言葉で非難されるのである。「そこには、われわれ貴族たちの強欲・掠奪・迫害と、貧しい人びとの頼りない境遇が、あらわれている。――飢えたけだもの、あくことを知らぬ蛭であるわれわれは、農民に何を残しているか？　奪いさることができないのは――空気。しかり

空気ばかりである」（訳二九六頁）。「そこの市民の三分の二が、市民たる身分をうばわれて、法律上のある部分では死人であるような国を、幸福な国と呼びえようか？　ロシヤにおける農民の、市民としての状態を、幸福なものといえるだろうか？　ひとり、血に飽きたらぬものばかりが言う、かれは幸福だ、なぜならもっとよい状態のことを、知らないからだ、と」（訳一六八頁）。これらは最もあからさまな言葉でなされた、ツアーリズムと地主支配に対する告訴状なのである。

そしてこれらすべては、フランス啓蒙思想の、理性と社会契約の思想を武器として語られた。彼はこの武器を第三階級の為にではなく、ロシヤの農奴の為に使った。エカテリナ二世をして、斧でおびやかされるツアーリとは一体誰のことを言っているのかと叫ばしめ、かつ、恐らくは「旅」の中でももっともあからさまにツアーリの死について語っている頌詩〝自由〟を我々は驚きの念なしには読むことができぬ。このような言葉をわれわれ日本人はその歴史の中に恐らくは持つことができなかったであろう。

いたるところ、戦いの軍勢が起きあがり、
期待はすべての人びとに武器をとらせる。
王位に立つ圧制者の血のなかに、
おのが恥をすすごうと、早やすべてのものは急ぐ。
わたしは見る、鋭き剣はところきらわずきらめき、
死がさまざまの姿をして、
ツアーリのごう慢な頭上に跳梁するのを。
歓喜せよ、鎖につながれた国民たち、見よ、自然の復讐の権利が
ツアーリを断頭台へ、ひきたてたのだ。
（訳二五三頁）

「わたしがあたえた権力の罪人よ！
語れ、わたしが王冠をさずけた悪党よ、
いかなれば、わたしにそむくことをあえてしたか？
（社会契約の思想、訳二五四頁）

だがおまえは、わたしにあたえた誓いを忘れ、
わたしがおまえを選んだことを、忘れてあげく、
王位につくのは、自分のなぐさみのためであり、
あるじはおまえであって、わたしではないと思いあがった。
（訳二五六頁）

あらゆる悪人のなかでもこの上なく凶悪な悪人……
死ね！　おまえなど百たびでも死ぬがよい！」――
（訳二五八頁）

しかもこれらの言葉は勃興する資本家によってではなくて貴族によって、それも貴族のためにではなく農奴のために、ツアーリに対して語られたのである。彼はこの言葉をシベリヤ流刑と放免後の自殺とを以てあがなわねばならなかった。我々は次の言葉の中に彼の、啓蒙思想への確信と、勇気とを推察しよう。「無知の時代に神を容赦しない人は、意識と理性の時代にあっては不法な権力を容赦しないだろう。全能の神の雷を恐れないものは、絞首台を何とも思わない。だからこそ思想の自由は、政府にとって恐ろしいのだ。心の底まで感動させられた自由思想家は、大胆にして、しかも力強くしっかりした手を、権力という偶像にのばし、そのマスクやヴェールをはぎ取ると、その内実をさらけ出すだろう」（訳二〇〇頁）。

四、問題点と結び

ロシヤの農奴の為に、ロシヤの貴族によって書かれたというそれ自体の矛盾的性格の為に、この書物は内容的にもある非一貫性、矛盾的性格をもつことになったように思われる。その例をここにいくつかあげて今後の問題にしたい。訳者渋谷氏も「彼は、民衆による革命の理論を主張はしても、それへみちびく道程を指摘することができない。彼はだからこそ……地主たちが自分の特権を自発的にゆずって農民の『救済者』になる、といった『上からの改革』をもちだすようなことをするのである」（あとがき、三四三頁）と述べておられるが、更にそれ以上に、普通いわれるようにラジーシチェフが啓蒙君主への期待を全く持たなかったといい切れるかどうか、私には疑わしく思われる。スパスカヤ・ポーレスチでツアーリになった夢をみた時に「おお、それが（真理をみぬく力をもった指環のこと）もし、たとえツアーリの小指にでもよいから、はまってたとしたら」（訳五九頁）という辺りの叙述はそれを裏づけるかのように思われる。第二に、過去の偉大なツアーリへの追慕の念がみられ（訳一六四頁）これが第一の点と同じく彼の革命的信条を緩和しているかのように見える。第三に、彼は上からの改革をも評価した為に、プガチョフの乱のような下からの革命運動を必ずしも正当に評価していないように見える部分があること。たとえば「彼らは束縛をゆすぶるという利益よりも、むしろ報復の喜びを求めたのだ」（訳七六頁）。第四に、彼は唯物論ではなく、理神論の立場をとっているが、神と理性のこの親和は、一体どのように彼の革命思想の徹底性を制約しているだろうか、又彼の認める神とはどんな神なのか。第五に、「フランスにおいてすべての人が自由について繰りかえし語り、放縦と自由があらん限りの極端に達した今、フランスでは検閲が廃止されていないのだ」（訳二二二頁）という言葉は、渋谷氏のいうように、彼が「ジャコバン党の独裁をみとめる決心がつかない」（三四三頁）ことの証左として解釈できるかどうか。私にはむしろ、のちにゲルツェンが見破ったように、ラヂーシチェフも又、フランス革命のブルジョア的限界を見破ったことの証左であるように思えるのである。

このようにラヂーシチェフの思想の矛盾、非徹底性をつくのは、何も彼の思想の革命性を低く評価するためではもちろんない。彼の階級的立場、彼の時代が彼に課した諸制約の中から、どのように彼が革命的な思想を発展させることができたか、その具体的構造を知り、そこでの彼の積極的な勇気をこそ高く評価したい為である。

さて最後に訳文に関していえば文学から社会批判へと深化しはじ

めた現段階に対応して、ロシヤ文学の翻訳のけんらんさに比べれば可成りよみづらい部分がなくはないが、誠実な訳業は、行きとどきすぎる位行きとどいた脚注と併せてロシヤ社会思想の研究を深める上に大きな貢献をなすであろう。重ねて渋谷氏の努力に敬意を表したい。

（野地　洋行）

ジャック・ドウニー著

『競争的過程』

（Jack Downie; The Competitive Process. 1958. Duckworth. London. pp. 199.）

本書の取り扱かう範囲は、その標題からうかがわれるほど一般的なものではない。競争的過程とはいっても、主な内容は一産業内の生産効率の分布および成長を、競争とその制限行為を通じて分析しようとするものである。しかもその背景にあるのは、現在のイギリス産業とそれを規制する独占および制限慣行法であり、対象は実践的なものに限定されている。

まず本書の構成は次のごとくである。

序論。第一章、研究の対象。

第一部　理論。第二章、企業の理論。第三章、概念と定義。第四章、問題の再論。第五章、理論の性質。第六章、トランスファー・メカニズム。第七章、効率格差とイノベーション・メカニズム。第八章、加入と脱退。第九章、均衡はいかにして達成されるか。第十章、ゲームの規則。

第二部　実際。第十一章、経験的調査の要約。第十二章、概念の有効性。第十三章、経験的素材。第十四章、効率変化の程度。第十五章、効率と成長。第十六章、効率の変化。第十七章、結論。

本書は、このように、理論的分析を展開する第一部と、それを実証的に検討する第二部に大別されている。ここでは、紙数の都合から、第一部の要旨を簡単に紹介することにするが、第二部では、イギリス産業に関する多数の資料が引用されているので、興味のある読者は、直接原著のその部分に当ってほしい。

我々が市場経済――ドウニーによれば、資本が私的＝非政府的に所有運営される経済――を経済組織のうちで弁護しうるものと考えるのは、多くの資本所有者や運営者達の対抗的行動が社会にとって満足な結果を生むだろうと想定するからである。この点で、市場経済はスポーツ・ゲームに似たところがあるが、対抗的行動が激しくなればなるほど面白くなるゲームとは、ゲームの規則上で質的な相違がある。市場経済におけるゲームの規則――具体的には協定――は、近年になって多くの関心を集めた。従来、イギリスでは、裁判所はこの規則に関心をもっていたが、議会は無関心であり、政府は規則の設定を企業の側にまかせようとしてきた。しかし今日では、前述の法規も制定され、どのような規則をだれが決めるかに関する論争が、さかんに行なわれている。この規則の如何によって、市場行為とその効果も変化してくるので、市場の統制ひいては独占の統制とゲームの規則とは不即不離の関係にある。

ところで、ゲームの規則の基準となるのは、市場経済の場合では公的利益であろう。ドウニーは、この公的利益の対象を、公衆が現に関心をもっているものと、ごく実用的に解釈する。かかる公的利益の観点からみて、戦後の市場行為のなかで注意を惹くものは、次の二点であった。すなわち、第一に、企業活動がほぼ同じ系統に属する企業間に広範囲かつ継続する効率の分布がみられること、第二に、イギリス産業内で、生産物および生産技術上の新機軸（イノベーション）の伝播が遅滞することと、その結果として効率の成長が停滞すること、である。この事態は、経済行為に対して種々のゲームの規則が与える効果を分析するにあたって、重要な意味をもつ。ゲームの規則を通じて競争は制限をうけるが、それによって公的利益はどのような影響をうけるかは本書が解こうとする主要な問題であるから、以下はもっぱらかかる二点とゲームの規則との関連を扱かうことになる。

従来の企業理論では、驚いたことに、この関連への配慮が乏しかった。というのも、経済上のゲームの規則がもつ実質的な効果は少ないであろうとの先入観が支配し、ごく素朴な均衡概念が普及していたからである。しかるに、今日圧倒的な寡占市場の存在を前提とすれば、企業理論の分析武器では提示された問題を処理することは不適当となり、その中心をなす均衡概念も放棄されなければならなくなる。

このように考えて、著者は必要な概念規定を試みる。その結果からみると、種々の難点があるにせよ、概念はすべて実用性に基いて規定される。すなわち、産業は、その内部でより効率的な企業への発展、あるいは高効率企業による低効率企業の吸収が行なわれうる事業系統に基いて分類され、具体的には、公式統計による一五六の産業分類が採用される。効率の定義は最も困難なものだが、便宜上次の指数が考案される。

$$\varepsilon=\frac{v+\nu k}{q_1p_1+q_2p_2+\cdots\cdots+q_np_n}\quad\left(\begin{array}{l}\sum q_ip_i=s\ \text{トオケバ}\\ \dfrac{k}{s}=\beta\end{array}\right)$$

$$\varepsilon=\frac{v}{s}+\frac{\nu k}{s}=\frac{v}{s}+\nu\beta$$

$$\nu=\frac{s-v}{k}\ \text{トスレバ}\quad \nu=\frac{1}{\beta}-\frac{v}{k}$$

$$\text{マタ}\quad \frac{v}{k}=\frac{v}{s}\cdot\frac{1}{\beta}\quad \text{カツ}\quad \frac{v}{s}=1-\nu\beta$$

シタガッテ　$\varepsilon=1-\beta(1-\nu)$

v＝投入費用十減価償却費用

k＝使用資本の価値

ν＝産業の平均（資本）利潤率

ロニデハ平均利潤率ヲ使用資本ノ費用ヲ考エル。マタ，ε ハ明